

学習習慣を形成するための指導の在り方

—— 授業と家庭学習を一体化させるユニット・デザインの取組 ——

高校教育研究会議

畑中 久枝¹

五味 博²

山本 大³

高橋 直樹⁴

要 約

学習習慣の形成をめざし、授業と家庭学習を有機的に連動させるプログラムとしてユニット・デザインを考案した。単元を単位として授業と家庭学習を一体化させる取組を実践し、家庭学習の充実と教師の授業改善を組み合わせ、両者の活性化を図った。ユニット・デザインに基づく一連のプロセスは、PDCAサイクルが自然に働くことをめざした仕組みである。実践を通じて徐々に学び方に習熟し、見通しや振り返りを生かした学習意欲の向上や、繰り返しの学習による授業理解の向上を達成しながら、学習習慣の形成を図り、一定程度の成果を確認することができた。

キーワード：知識基盤社会 学習習慣 ユニット・デザイン 見通し 振り返り PDCA 学習意欲

目 次

I 主題設定の理由	88	(2) 授業者から見たユニット・デザインの	
1 はじめに	88	成果と課題	102
2 学習習慣についての考察	88	III 研究のまとめ	103
(1) 知識基盤社会において求められる学習	88	1 研究の成果①	
(2) これから求められる学習習慣の在り方	89	～生徒の記述とインタビューから～	103
(3) 学習習慣をとらえる4つの視点	89	(1) 学習への必要感と期待感の向上	103
3 川崎市立高等学校アンケート調査結果	90	(2) 学習意欲の向上	103
II 研究の内容	91	(3) 学び方の習得	104
1 課題解決の方向性と研究の構想	91	(4) 学習習慣の形成	104
(1) 課題解決の方向性	91	2 研究の成果② ～データから～	105
(2) ユニット・デザインのコンセプト	91	(1) アンケート結果から	105
(3) ユニット・デザインに基づく		(2) 授業の理解度の向上	105
指導計画等の作成と活用	93	(3) 学力の向上	105
2 授業実践	96	3 今後の課題	106
(1) 数学・国語・英語の授業実践	96	参考文献	106
		指導助言者	106

¹ 川崎市立橋高等学校総括教諭（長期研究員）

² 川崎市立川崎高等学校教諭（研究員）

³ 川崎市立川崎総合科学高等学校教諭（研究員）

⁴ 川崎市立商業高等学校教諭（研究員）

I 主題設定の理由

1 はじめに

新しい知識・情報が絶え間なく更新される知識基盤社会を生きるわれわれには、柔軟な知性と自ら学び続けようとする姿勢が求められる。激しく変転する社会にあって、生きる力を発揮し自己実現を果たすためには、進んで新しい知識・情報を吸収し、それらを適切に処理し続けなければならない。学習習慣の形成は時代の要請の一つであるといえよう。

この学習習慣という言葉は、学習指導要領に今回新たに規定が追加されたものである。高等学校学習指導要領⁵では「生徒の発達の段階を考慮して、生徒の言語活動を充実するとともに、家庭との連携を図りながら、生徒の学習習慣が確立するよう配慮しなければならない」としている。

小学校・中学校の学習指導要領においても同じように学習習慣の確立が求められ、その解説では「授業の冒頭に当該授業での学習の見通しを生徒に理解させたり、授業の最後に生徒が当該授業で学習した内容を振り返る機会を設けたりといった取組の充実や、生徒が家庭において学習の見通しを立てて予習をしたり、学習した内容を振り返って復習したりする習慣の確立などを図ることが重要である。」としている(図1)。



図1 学習指導要領および解説より

このように、学習習慣の形成(確立)は今日的な教育にとって、重要な課題の一つである。そして、上述のように手がかりは文部科学省によってすでにある程度示されている。このコンセプトに従って学習習慣形成のための手立てを考え、実践を試みる。

2 学習習慣についての考察

(1) 知識基盤社会において求められる学習

知識が絶え間なく更新される今日、知識の在り方は固定的なものではなく、柔軟なネットワークであることが求められ、学習は静的なものではなく、動的で常に変化を伴うものとなった。われわれは絶えざる変化に対応し、常に自分自身を更新していかなくてはならない。

新しい知識の習得は、既知を手がかりに行われる。既知を活用し、類推して未知を取り入れ、既知との関連性のもとに位置付け、それまでの知識を更新していく。そして、必要な時に必要な知識を呼び出し、課題に応じて組み合わせて活用できるようにすることが求められている。学習とは、異なる要素や考え方について、相互の関連や結び付きが明確になるように情報を組み合わせ編集する作業であるといえよう。このような学習の在り方はキーコンピテンシー⁶の「知識・情報・技術など知的な道具を相互作用的に用いる能力」に通ずる。

ここで、学習において知識のつなぎ方が重要であることが見えてくる。つなぐとは思考の広がりや新たに創り出すことであり、考え方・学び方⁷重視に直結する。伝統的な学習では内容が重視されてきたが、これからの知識基盤社会における学習では、それに加えて考え方・学び方が重視される。

⁵ 高等学校学習指導要領第1章総則第1款教育課程編成一般方針

⁶ 経済開発協力機構 (Organisation for Economic Co-operation and Development) が、学力の国際標準として示したコンピテンシー(能力・有能)概念。

⁷ 認知心理学では「学習方略」といわれ研究が深められている。本研究でもその考え方を援用している(Ⅲ-1(3)参照)。

(2) これから求められる学習習慣の在り方

一般に、習慣とは日常的な行動様式や姿勢である。学習習慣とは、学ぶ姿勢が身に付き自然に学習に取り組めることといえよう。一日の生活の中に家庭学習の時間が位置付けられ、一定時間の学習を継続していることを指す。やる気を持ち、必要な学習を自ら考えて自然にできることが重要である。

では、このような在り方に加え、今日求められる学習習慣とは、どのようなものか。

必要なのは、絶えず更新される知識と知識を結び付けることである。それには、学習場面にP D C Aサイクル⁸を援用し、学習と学習をつなぎ、フィードバックの連鎖を作ることが有効である。まず、学習への予測により、自分にとっての困難度や可能性を測る。予測は学習のプロセスを見えやすくし、習得を助ける。そして、学習後の自己評価を次の学習に向けてフィードバックし見直しを修正する。この時点で自分の成長の確認や、不足している知識は何かを見つけ、次の学習へ向けた準備や対策を行うことができる。こうしたフィードバックの限りない連鎖が、一人一人に気付きをもたらし、主体的に学ぼうとする姿勢を育む。ただ習慣的に処理するだけではなく、内省と洞察とを必要とする。知識基盤社会を提唱した経営学者ドラッカー⁹は「これからは基礎教育に加え、方法に関わる知識、今まで学校では教えようとしえしなかったものが必要になる。特に知識社会においては、継続学習の方法を身に付けておかなければならない。(略)学習の習慣が不可欠である。」としている。ドラッカーもやはり習慣的に事を処理すると同時に内省する人間像を描いている。

(3) 学習習慣をとらえる4つの視点

学習習慣はいろいろな側面からとらえることができる(図2)。学習指導、生活指導、キャリア教育、生涯学習といった主に4つの視点から学習習慣の形成に向けた取組や実践が行われている。

学習指導の視点から学力向上をめざし、学習習慣を形成しようとする高等学校の

取組は全国的に数多い。例えば、土曜授業、家庭学習ノート、朝読書などである。また、自習室の設置などの学習環境整備によって学習習慣の形成をめざした例も多い。これらの取組には一定の意義があるが、授業と計画的に関連付けられたものは少ない。本研究では、日常の授業と結び付いた学習習慣の形成をめざす。授業こそが、学習習慣の必要性を実感させることのできる場である。家庭学習に求められる課題を踏まえつつ、授業を通じて教師が学習習慣の形成に寄与しうる手立てを考える。

学習指導の視点から日常的な学習習慣を形成することは、自己実現や進路実現の可能性を広げることにつながる。さらに、卒業後のキャリアアップや生涯学習の支えともなる。したがって、学習習慣の形成は一人一人の豊かな人生に寄与しうるものと考えられる。

なお、生活指導の視点からの取組は、高等学校よりも小・中学校を中心に実践されている。生活習慣の一部として学習習慣の形成をとらえ、生活リズムの中に家庭学習時間を位置付けることをめざしたものが多く。その必要性は高等学校においても同じである。

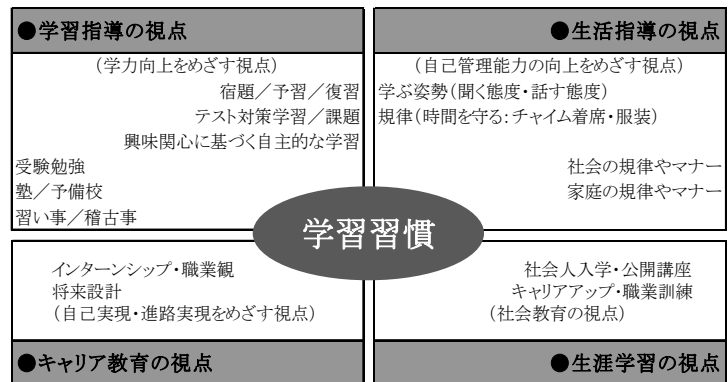


図2 学習習慣をとらえる視点

⁸ <http://ja.q-bpm.org/mediawiki/index.php/PDCA> 最もシンプルなマネジメントシステムとして知られるP計画→D実践→C評価→A改善というサイクル。第二次世界大戦後、ウォルター・シューハートらが提唱した業務管理の基本的な考え方で、気付きをもたらす仕事のやり方を向上させることから、多くの企業が社員研修に採用している。

⁹ P・F・ドラッカー著/上田惇生訳『ポスト資本主義社会』ダイヤモンド社2007年 p253

3 川崎市立高等学校アンケート調査結果

本研究に際し、川崎市立高等学校のうち3校で学習状況についてのアンケート調査を309人に行った。その結果から考える。

まず、47.8%の生徒はほとんど授業以外に勉強をしない(図3)。川崎市小・中学校教育基本調査(図4)¹⁰と比較すると、高校生は小・中学生よりも勉強をしない傾向にある。

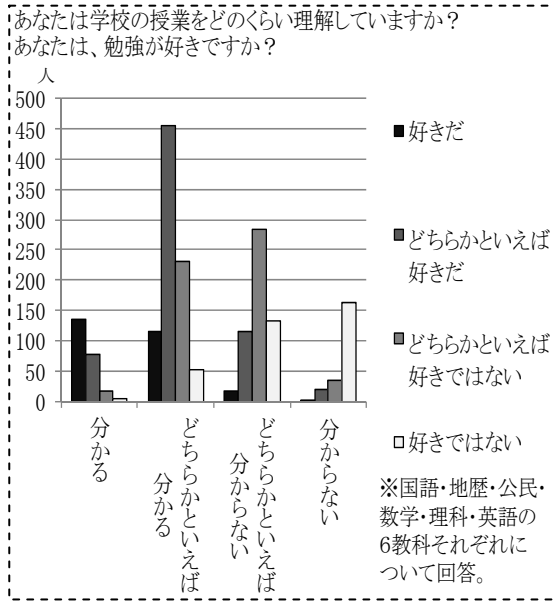


図6 市立高校生へのアンケート③

授業への理解度と勉強への好感度の相関関係を調べたところ、「分からない」と「好きではない」は関連があることが読み取れる(図6)。41.3%の生徒が、授業を「分からない」あるいは「どちらかといえば分からない」と答えている点も見逃せない。

また、69.5%の生徒が「上手な勉強の仕方が分からない」(Ⅲ-2(1)図14)と答えている。「勉強は大切だと思うが、授業はよく分からないし勉強の仕方も分からないので好きになれない。だから勉強をしない。」そんな生徒たちのつぶやきが聞こえてくるようだ。

文部科学省は、全国学力・学習状況調査¹²の分析で、平均正答率の高い学校群は家庭学習や学習方法への具体的な取組を行っている割合が高いことを示している(図7)。家庭学習支援の方法を工夫し、生徒一人一人に確かな学習習慣を形成していくことが、川崎市立高等学校にも求められている。

平均正答率が5ポイント以上全国平均を上回る学校(A群)の方が、5ポイント以上全国平均を下回る学校(B群)より、国語・数学の指導について、学校では、生徒に家庭での学習方法等を具体例を挙げながら教えるようにしていると回答している割合が高い傾向が見られる。

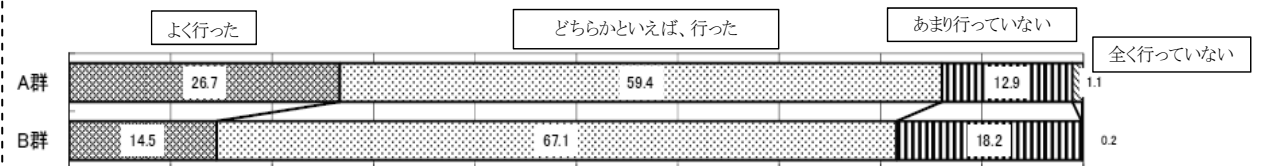


図7 全国学力・学習状況調査(中学校)

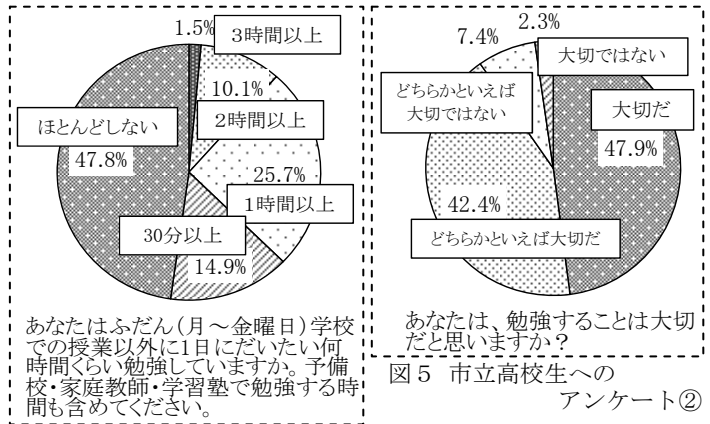


図3 市立高校生へのアンケート①

図5 市立高校生へのアンケート②

学年	3時間以上	2時間位	1時間位	30分位	ほとんどしない
小4	7.9	16.6	31.1	33.6	10.6
小6	12.9	16.2	30.5	28.4	11.8
中3	4.9	20.1	28.3	21.4	25.2

図4 平日の家庭学習状況(勉強時間)

一方で、勉強を「大切だ」あるいは「どちらかといえば大切だ」と答えている生徒は90.3%にのぼる(図5)。ほとんどの生徒が勉強を軽視していないことが分かる。勉強への好感度を見てみると、「好きだ」と「どちらかといえば好きだ」を合わせた数字は21.4%で、川崎市立中学校学習状況調査¹¹の23.7%よりもやや低くなっている。

¹⁰ 平成23年度「川崎市小・中学校教育基本調査報告書」川崎市総合教育センター

¹¹ 平成23年度「川崎市立中学校学習状況調査」川崎市総合教育センター

¹² 平成22年度「全国学力・学習状況調査 調査結果のポイント」(中学校) p19 国立教育政策研究所

こうした高校生学習の現状に向き合い、彼らの未来に寄与することをめざし、次のように主題を設定した。

研究主題

学習習慣を形成するための指導の在り方

—授業と家庭学習を一体化させるユニット・デザインの取組—

Ⅱ 研究の内容

1 課題解決の方向性と研究の構想

(1) 課題解決の方向性

市立高校生へのアンケートからは、様々な問題点が読み取れるが、本研究では次の2点に着目した。

- ① 授業が分からない。勉強が好きではない。
- ② 勉強の仕方が分からない。

①の「授業が分からない。勉強が好きではない。」には「分からない」だから「好きではない」という因果関係が容易に推察される。授業で分かることを実感できれば、学習意欲が生じ、自然に学習に取り組めるようになる。また、①は学習内容が分からない状態であり、②は学び方が分からない状態である。両者は密接不可分であり、両者の解決をともにめざすことが必要である。

授業が分からない児童生徒の割合は、学年が上がるとともに上昇し、小学校6年生で7.6%、中学校3年生で18.8%（川崎市小・中学校教育基本調査）、高等学校では4割を超える。背景には様々な要因が考えられるが、本研究では家庭学習と授業に焦点を当てる。生徒の分かろうとする努力と、教師の授業への工夫改善を組み合わせた実践を行う（図8）。一般に高等学校の授業内容は中学校より難しい。確実に習得し活用できるようにするには、家庭学習の充実が不可欠である。しかし、市立高校生の家庭学習は宿題が中心で（表1）、自分で考えて主体的に学習する割合は低い。そこで、家庭学習が確実な授業への足場かけ¹³となるよう家庭学習と授業を連動させる取組を行い、主体的な学習を促し、学習習慣を培いつつ授業が分かるように導く。

また、自然にPDCAサイクルが働く仕組みを工夫し、学習対象に応じた学びを積み重ね、振り返りをしながら学び方に成熟していくことをめざす。「勉強の仕方が分からない」という生徒も、授業と家庭学習の連続の中で、実践を繰り返すことによって徐々に勉強の仕方が身に付いていく。

(2) ユニット・デザインのコンセプト（図9）

授業と家庭学習を結び付けようとする取組には、福岡県立修猷館高等学校¹⁴のシラバスを活用した実践がある。シラバスに家庭での勉強方法を併記し、家庭学習を充実させることを通じて学力向上を

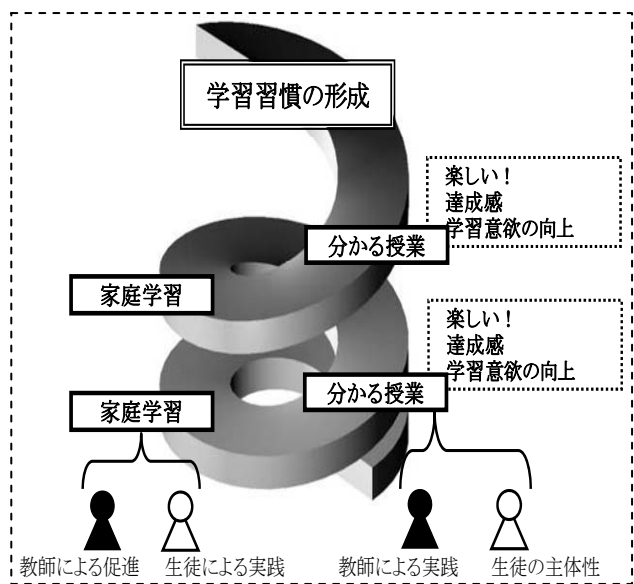


図8 授業と家庭学習の結び付きのイメージ

表1 市立高校生へのアンケート④

宿題のほかに毎日勉強する	6.2%
宿題のほかに時々勉強する	40.4%
宿題だけ勉強する	44.0%
宿題があってもあまり勉強しない	9.4%

¹³ 三宮真智子編著『メタ認知 学習力を支える高次認知機能』北大路書房 2009年 p46 遂行を高めるための支援

¹⁴ 事例紹介 http://benesse.jp/berd/center/open/kou/view21/2004/04/06syllabus_05.html

図り、学校全体で大きな成果を上げている。

本研究では、より具体的に単元を単位とした取組を行う。単元の指導計画・予習・復習・単元テスト・授業づくりをセットにしたプログラムを「ユニット・デザイン」と名付け、それに基づいた実践を行う。予習・授業・復習の円環を有機的に連動させ、家庭学習と授業の一体化をめざす。このプログラムを通じて、生徒にPDCAサイクルを自覚させ、繰り返しの学習で授業への理解を促すとともに、学び方に習熟させる。家庭学習と授業の一体化、見通しと振り返りによるフィードバックの連鎖の中で、生徒が自分の成長を見極め、自分に合った学び方を発見しつつ学習意欲を高めていく姿を求めたい。そして、ユニット・デザインに基づく実践を通じて学習習慣の形成を図る。

家庭学習が授業への確実な足場かけとなることで学習への必要感が生まれ、自分の努力によって分かったことが「やればできる」という期待感を高める。授業では生徒がつまづきやすいポイントを予測し重点化し、考え方を中心とした解説を行う。生徒は予習で分からなかったことが授業で解決することで、分かったという実感をもつ。また、生徒は課題について何らかの考えをもって授業に参加するため、目的意識や学習意欲が高まる。生徒の意欲や家庭学習を生かす場としてグループ学習を適宜取り入れる。

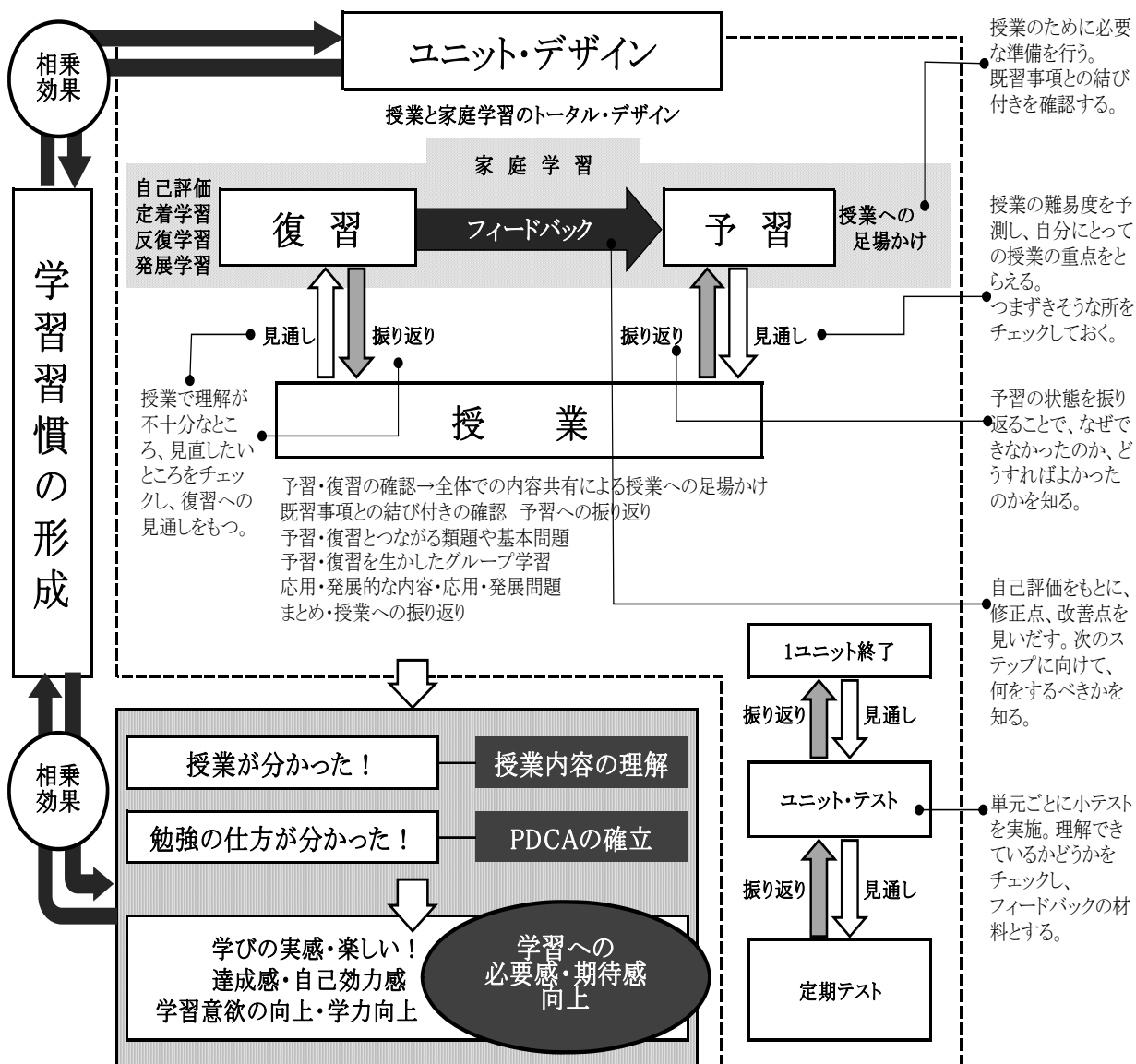


図9 ユニット・デザインのコンセプト

(3) ユニット・デザインに基づく指導計画等の作成と活用

① 指導計画の作成

指導計画作成の際には、次のような様式と手順で取り組んだ。

教師はまず単元の目標を確認し、この単元を通じて生徒がどのような資質・能力を身に付けるのかを把握する。目標に照らして単元に関わる教材観・生徒観・指導観を整理する(表2)。その際、生徒観と指導観の中に、ユニット・デザインに基づく視点を組み込む。生徒観では、既習事項の習得状況の把握や生徒がつまづきそうな新出事項の予測から、家庭学習で生徒が取り組める内容を吟味する。また、指導観では、家庭学習を授業でどう生かすかを工夫する。

表2 教材観・生徒観・指導観

教材観 単元の概略・特徴	①単元内容の把握	・単元の学習内容・教材の特色の把握
生徒観 生徒の立場に立った 教材の把握	①単元に関連する既習事項	・関連する既習事項の内容と方法 ・既習事項の定着状況 ・十分身に付いていない既習事項・つまづきの原因の考察 ・生徒の持つ生活体験上の予備知識
	②予測	・教材についての生徒の興味関心の予測 ・つまづきが生じそうな部分や必要な配慮の予測 ・本単元での習得により、生徒がどのようになるか、今後はどうつながるかの予測
	③ユニット・デザインに 基づく生徒観	・生徒が一人で取り組める内容の予測 ・効果的な予習・復習内容の吟味
指導観 指導過程と学習活動の 工夫	①学習展開	・順序や時間配分の工夫 ・学習方法の工夫(全体・グループ・ペアなど/プリント・ワークシートなど)
	②評価	・評価の方法
	③ユニット・デザインに 基づく指導観	・家庭学習状況を把握し授業に生かす工夫 ・見通しと振り返りを促しPDCAサイクルを自覚化 ・学習習慣の意義を伝え、学習習慣の形成を促進

次に、ユニット・デザインに基づく単元全体の指導計画を立てる(表3)。毎時間の目標、授業内容と要点、それに合わせた予習・復習内容、評価規準・方法を組み合わせる。授業内容だけでなく、予習・復習内容を含めて生徒の当該単元の学習をトータルに考える。授業ごとの重点目標に予習・復習内容を重ね、家庭学習を授業に生かすことで、生徒に家庭学習の有効性を実感させる。

表3 ユニット・デザインに基づく指導計画の一例(英語 一部抜粋)

回	目標	授業内容	必須ポイント・重要語句	予習内容 (何を・どのように)	復習内容 (何を・どのように)	評価規準 評価方法
1 / 6	音読練習から 本文の内容を 推測する	LESSON1ユニット・テスト 新出単語・熟語 本文空所補充 LESSON2本文の音読	本文内容・文法事項理解 単語の発音・意味を覚える しっかり聞き取る 積極的に音読練習	LESSON1総復習 ・文法事項を見直す ・本文内容を見直す 単語・熟語を覚える	ユニット・テストの復習 新出単語・熟語 ・発音練習・意味 Lesson2本文の音読	ア① 活動の観察
2 / 6	本文の内容 理解 不定詞の副 詞的用法の 理解	導入(動画) 新出単語・熟語 本文音読 グループ学習:本文読解 本文の意味の確認	文化の相違の理解 単語の発音・意味を覚える 積極的に音読練習 積極的に話し合う 発表態度・聞く態度	本文の意味を考える (4文目まで)	単語・熟語 ・次回テスト対策 本文の読み直し ・復習チェックのところ Creative Writing プリント	ア① ウ① エ② 活動の観察 ワークシート

② ユニット・デザイン・シートの構成と活用 (図10)

教師は①の指導計画を基に、ユニット・デザイン・シート(ワークシート)を作成し単元開始前に生徒に配布し、授業時には毎回持ってくるように指示する。

ア 構成

ユニット・デザイン・シートは、振り返りのしやすさを考え、予習・授業・復習という時系列に従って構成した。学習内容と必須ポイントを示し、それに対する理解度を記号で記入するようにした。また、その日の授業を振り返る自己評価欄と感想欄、単元末にはユニット・テストの自己分析欄を設け、フィードバックの材料とすることができるようにした。

ユニット・デザイン・シートの書式については、生徒へのアンケートや授業担当者の意見を参考に、

試行錯誤を重ねた。生徒の記入に負担感のないような工夫と振り返りのしやすさに重点を置いた。生徒が「いつ・何を・どのように」学習すればよいかを明示することで「勉強の仕方が分からない」という声に対応し、授業を通じて予習・復習などの家庭学習の仕方を伝えられるように配慮した。

イ 活用

生徒はユニット・デザイン・シートを受け取り、まず単元全体へのおおまかな見通しをもつ。そして、シートを参考に教科書などを見ながら予習・復習に取り組み、円滑に授業内容を習得できるように準備をする。予習・授業・復習ごとに理解度と感想(振り返り)を記入し、それを繰り返すことでPDCAサイクルを実践していく。単元の学習が終了し、シートの記入が完了すると、シートは一人一人の学習内容への理解度の一覧表になっている。それを復習の目安として活用する。教師は単元終了後にシートを一旦集め、生徒の学習状況を把握し教師自身の振り返りに生かす。その後、生徒に返却する。

ユニット・デザイン・シート		年	ルーム	番	氏名	記入例数学
(単元名)		確率とその基本的な性質				<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 生徒に 要点を 伝える </div>
(単元の目標)		・ 確率の意味や基本的な法則についての理解を深め、それらを用いて事象の確率を求めることができるようにする。				
(評価の方法)		・ 平常点：ユニットデザインシート、週末課題、問題集、関心・意欲 ・ テスト：定期考査、ユニットテスト				
予定	日付	予習内容	授業内容	必須ポイント 重要語句	復習内容	
	4/12	<ul style="list-style-type: none"> 教科書P.9の復習(補集合) 教科書P.42, 43を読破 教科書P.42の例12 教科書P.42の例13 	<ul style="list-style-type: none"> 余事象の確率 教科書P.43の例題5 	<ul style="list-style-type: none"> 用語の理解(余事象) 余事象を利用して確率を求める方法を理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> 問題集P.32(47・48) ユニットテスト対策 	
	生徒記入欄	↑予習チェック ◆その他の予習内容や感想 「一応、解いてみたけどまだよく理解できていないので、授業でちゃんと学習しようと思います。」	↑理解チェック ◆授業の感想 「予習をして、少し理解できていなかったところを、しっかりと理解して、問題をスラスラ解けた。」	日の授業の理解度 B	↑復習チェック ◆その他の復習内容や感想 「問題集をやって、ユニットテストに向けて、章末の問題などで確認できた。」	
ユニット・テスト 得点	自己分析	94 問題集などで解けても、テストになると、かけるのが、たすのが、ごちゃごちゃになる。よく分からなかったから、定期考査までには、ちゃんと出来るようにしたい。				この生徒はユニット・テストの結果から、フィードバックの材料を得ている。
記入例英語		内容ごとに理解度を記号で書き入れ、どこが分からないかを明確にする。				
習内容	9/20	○ 本文の意味を考えてくる(指示されたところまで) プリントの表	● 教書本文の音読 ● グループで本文の意味を話し合いまとめる ● 本文の意味の確認	積極的に音読練習に取り組む グループ内での話し合いに積極的に参加する	○ 英単語・熟語練習(次回テスト) 復習のチェックがある部分を読み直し、再確認する。	
	生徒記入欄	↑予習チェック ◆予習内容や感想 「新出単語以外でわからない単語があったので辞書をつかって確認しました。」	↑理解チェック ◆自分自身への振り返り・見直し 「Prettyに2つの意味があると知らなかったけど、だいたいの意味はあつたら全部。単語がわからなくても意味は理解できるかな、と思う。」	振り返りで自分への教訓を書いている。 今日授業の理解度 (A) B C D	↑復習チェック ◆復習内容や感想 「単語テストは前や、たのめ合表でたから、やりました。」	毎回、授業を振り返り理解度を記入する。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> この生徒は、指示された以外にも学習し、授業への足場かけとなる予習をしている。 </div>		<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 生徒の振り返りや理解度の記述、ユニット・テストから、教師も生徒の習得の状態をつかむことができ、教師自身のPDCAにもなる。 </div>				

図10 ユニット・デザイン・シートの記入例(数学・英語 一部抜粋)

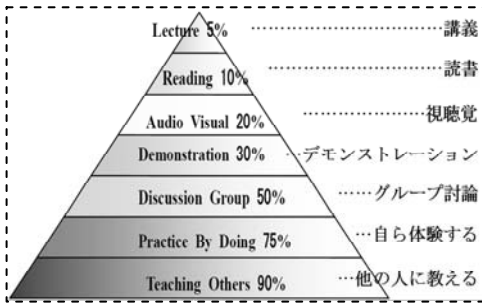


図 11 学習定着率

LESSON 13 New Telephone ユニット・テスト

Class - No. Name _____

① 日本文に合うように、空所に一語ずつ入れなさい。
 (1) 私はあらゆる苦難を経てきました。
 I have been () all sorts of hardships.
 (2) 彼女はピアノだけではなくチェロも弾きます。
 She plays not only the piano () the cello.
 (3) このあたりの人は土曜日ごとに買い物に出かけたものでした。
 People here ()() go to market every Saturday.

図 12 ユニット・テストの一例 (英語 一部抜粋)

③ 授業のポイント

教師は、適切なタイミングで予習を振り返らせ、なぜ分からなかったのか考えさせる。自分の強みや弱みを自覚させるとともに本時への見通しをもたせる。机間指導の際には、シートの記入状況に応じて称賛による価値付けや激励を行い、家庭学習の必要性を伝える。毎時必ず振り返りの時間を取り、シートの記入とともに復習への見通しをもたせ家庭学習へのアドバイスを与える。

なお、生徒の主体的な授業への参加や学習意欲の向上を促すために、グループ学習を取り入れることを試みた。中央教育審議会¹⁵の答申や学習定着率(図 11)¹⁶の研究によると、様々な教授方略を工夫することが授業効果を上げるとされている。

表 4 実践の流れ

④ ユニット・テストの作成と活用(図 12)

単元末には、生徒が理解度を確かめられるようユニット・テストを行う。内容は知識などの習得を中心とし、生徒の努力を反映させる。また、発展的な内容を一部含むことで、向上心を刺激することも工夫する。テストによる習得状況の確認は教師自身の振り返りにも有効である。

⑤ 実践の流れ(表 4)

ユニット・デザインに基づく実践の流れは表 4 の通りである。5月～6月にはシートの予習・復習内容を教師が全て詳細に記入し、授業の一環として予習・復習を行うよう説明する。学習動機としては外発的であるが、授業を通じ成果や成長を実感させ、「やればできる」という期待感と、学習への必要感を起こさせるよう導く。9月以降、生徒の様子を確かめながらシートの記入を少しずつ生徒自身の自主的な記入に切り替え、自分で学習計画が立てられるように導く。授業内のグループ学習などで共有する部分については、最小限の予習・復習内容を指示する。

5月中旬	*宿題等についてのアンケート※ *学習状況についてのアンケート
5月末	定期考査1
6月初	ユニット・デザイン開始 授業 : ユニット・テスト 授業 : ユニット・テスト *ユニット・デザインについてのアンケート
7月初	定期考査2 *ユニット・デザインについてのインタビュー
7～8月	夏季休業
9月	授業 : ユニット・テスト 授業 : ユニット・テスト
10月	定期考査3 授業
11月	: ユニット・テスト *学習状況についてのアンケート *ユニット・デザインについてのアンケート *ユニット・デザインについてのインタビュー
12月	定期考査4

アンケート・インタビューは生徒対象 ※のみ教師

いくつかの段階を経て動機づけが内面化されていくプロセスの理論は、認知心理学において深められている。外発的な動機付けを内発的なものに変えていくには、期待感と必要感を高め、学習意欲を向上させることが重要である。

¹⁵ 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」(中央教育審議会答申)平成 24 年 8 月 28 日 学士課程教育において、従来の知識の伝達・注的授業から、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていくアクティブ・ラーニングへの転換が必要であるとしている。この問題意識と転換の必要性は高等学校においても同じである。

¹⁶ 「Learning Pyramid」(出典:National Training Laboratories)平均学習定着率(Average Learning Retention Rates)
<http://www.ritsumeai.ac.jp/acd/ac/kyomu/cer/kikaku/06forum0920/pdf/1.pdf#search=Learning+Pyramid>

2 授業実践

(1) 数学・国語・英語の授業実践

ア 数学

「数学A」 A高校 1年生 4クラス 2単位 平成24年10月実施

① 単元名(教材名) 2章 確率 2節 いろいろな確率の計算 (第一学習社 高等学校 新編 数学A)

② 単元の目標 独立な試行や反復試行の確率、条件付き確率の意味を理解し、簡単な場合についてそれらの確率を求めることができるようにする。また、それらを事象の考察に活用できるようにする。

③ 単元について

教材観	①単元の学習内容・教材の特色 既習事項の確率の基本を理解した上で独立な試行や反復試行の確率を求める。また、条件付き確率の概念や確率の乗法定理を理解し活用する方法を学ぶ。条件付き確率の応用として、くじ引きの公平性を説明するなど具体的な問題を多く扱っている。
生徒観	①単元に関する既習事項 <ul style="list-style-type: none"> ・順列・組合せ、確率の性質、簡単な確率、加法定理、和事象、余事象を理解し、やや複雑な確率を求める学習をした。 ・順列・組合せや基本的確率の計算はできるが、やや複雑な確率の問題では順列と組合せのどちらを用いるのか迷う生徒が多い。 ②予測 <ul style="list-style-type: none"> ・反復試行の意味は理解できるが、計算が煩雑なため、解答を導き出せない生徒もいる。復習での類題演習で補いたい。 ・条件付き確率や確率の加法定理の活用として、社会事象の確率やくじ引きの公平性を検証する生徒が出てくると予測される。 ③ユニット・デザインに基づく生徒観 ユニット・デザインにより、既習事項が新出事項にどう結び付くかを理解し、復習の大切さを実感している。学習内容が難しくなっているが、類題演習にじっくり取り組ませることから、理解を深めさせる。
指導観	①学習展開 <ul style="list-style-type: none"> ・1時間に1項目を原則とし、どの既習事項をどう生かすのか考えさせながら学習を進める。 ・既習事項の復習をすることが、次の時間の予習になることを理解させ、しっかり復習することを促す。 ・グループ学習を通し、考え方を共有させたり、未知の問題に挑戦させたりし、考えることの大切さを理解させる。 ・問題演習の時間において、互いに教え合うことを積極的に行わせる。人に説明することが、理解を深めることにつながる。 ②評価の仕方と指導への生かし方 机間指導や発言、ノートやワークシートから考え方への助言をし、評価に生かす。 ③ユニット・デザインに基づく指導観 <ul style="list-style-type: none"> ・生徒はどこに着目して授業を受けるか見通しをもってきている。つまづきそうなところの解法に解説を焦点化し理解を深める。 ・自主的に副教材の問題集で復習している生徒が増えている。自主的な学習を促しながら、家庭学習の指示を徐々に減らしていく。

④ 評価規準

a 関心・意欲・態度	b 数学的な見方や考え方	c 数学的な技能	d 知識・理解
・独立な試行の確率や反復試行の確率に関心をもち、具体的な場面に活用しようとする。 ・条件付き確率や確率の乗法定理に関心をもち、調べてみようとする。	・独立な試行や反復試行の確率を求める式を導く過程を考察することができる。 ・条件付き確率や確率の乗法定理を導く過程を考察することができる。	・独立な試行の確率や反復試行の確率を求めることができる。 ・条件付き確率を求めることができる。 ・確率の乗法定理を用いることができる。	・独立な試行の確率や反復試行の確率を理解している。 ・条件付き確率を理解している。 ・確率の乗法定理を理解している。

⑤ ユニット・デザインに基づく指導計画(全5回)

回	目標	授業内容	必須ポイント・重要語句	予習内容	復習内容	評価規準	評価方法
1 / 5	・独立な試行について理解する。	独立な試行の確率 教科書p45例1	・独立な試行を理解する。 ・2つの独立な試行で、おのおのの事象がともに起こる確率を求められるようにする。		問題集p33(49) 教科書p46問1		発問評価
2 / 5	・独立な試行の確率が求められるようにする。	独立な試行の確率(確認) 3つ以上の独立な試行の確率	・独立な試行についての理解を深め、3つ以上の独立な試行の確率についても同様の方法で計算できることを理解する。	・教科書p46～47、独立な試行が3つ以上になった場合の確率の求め方 ・教科書p42、少なくとも～のような余事象の復習 ・教科書p47問2問3	問題集p33(50) 	a b	ユニット・デザイン・シート
3 / 5	・反復試行の確率が求められるようにする。	反復試行の確率 ・教科書p49例題1 反復試行の確率の求め方	・反復試行について理解する。 ・反復試行の確率が求められるようにする。	・教科書p48、反復試行の確率の求め方 ・教科書p49問4 ・教科書p49例題1	教科書p49問5 問題集p34(51・52)	b	シート
4 / 5	・条件付き確率の概念を理解し活用できるようにする。	条件付き確率 確率の乗法定理 ・教科書p52例題2 条件付き確率の活用	・条件付き確率の概念について理解する。 ・条件付き確率と確率の乗法定理の関係を理解する。	・教科書p50、条件付き確率の考え方 ・教科書p50問6 ・教科書p52例題2	教科書p52問7と8 問題集p35(54)	c	定期考査
5 / 5	・確率の乗法定理を理解し活用できるようにする。	・教科書p52問8 条件付き確率の復習 ・教科書p53例題3 確率の乗法定理 ・問10でグループ学習	・条件付き確率の概念(復習) ・確率の乗法定理を理解し適用できるようにする。	・教科書p53例題3 ・教科書p53問9問10	問題集p36(55) ユニット・テスト対策(教科書p54 確認問題)	a d	取り組み状況

⑥ 授業展開 (5/5)

復習	教科書p52問7問8 問題集p35(54)	予習	教科書p53例題3をノートに写し、解法を考える。 教科書p53問9問10を解く。
学習活動と予想される生徒の反応		指導上の留意点(・)と評価(☆)	
導入 (15分)	<ul style="list-style-type: none"> ・ユニット・デザイン・シートの記入 ・今日の学習内容への見通しをもつ。 ・前回の復習 問7を振り返る。 グループ学習 <ul style="list-style-type: none"> ・教科書p52問8(復習)をグループ内で確認し正答を導き出す。 ・友達から教わることで理解する。 ・友達に教えることで理解を深める。 全体で復習問題の答え合わせ ・グループの代表が、解答の過程を説明する。3名 ・解答の過程を理解し、正解を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ユニット・デザイン・シートを見ながら、日付の記入、次回テストの予告、今日の学習内容の確認 ・p52問7のグループ学習を振り返り、問8につながる条件付き確率について確認する。(グループは4人×10、席順) ・机間指導 助言 ・分からない生徒はグループ内でどんどん質問をするように指示 ・分かる生徒は積極的に教えるように指示 ・解答の過程を生徒の発言から板書説明 ・正解の提示 全体への確認 ・復習問題の解法が、本日の授業につながることを理解させる。 	
	展開 (25分)	<p>例題 3</p> <p>3本の当たりくじを含む10本のくじがある。最初aが1本引き、それをもとにもとさないで、次にbが1本引くと、bが当たる確率を求めよ。</p> <p>例題3を通し、確率の乗法定理を適用できるようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒は、くじの当たる確率は、先に引く人と後に引く人で差が出ると考えると予想される。 ・問9を解きながら、確率の乗法定理の適用方法を確認する。 ・問10を解く。 ・グループ学習 グループで相談し正答を導き出す。 	<ul style="list-style-type: none"> ☆条件付き確率(前回)を理解し問題を解くことができるか。(a,d) ・条件付き確率と乗法定理を結び付ける適用法を理解させる。 ・解答の過程を生徒の発言から板書説明 正解提示 全体確認 ・くじの当たる確率は引く順序に関係ないことを確認 ・樹形図を使った別の解法の説明 問9を発問しながら解かせ、確率の乗法定理の適用を確認 問9の応用として問10を解くように指示 ☆確率の乗法定理を適用できるか。(d) ☆くじを引く順序の考察ができるか。(a) ・机間指導 助言
まとめ (10分)	<ul style="list-style-type: none"> まとめ 全体で問10の答え合わせ ・グループの代表が、解答の過程を説明する。3名 ・解答の過程を理解し、正解を確認する。 ・ユニット・デザイン・シートの記入 	<ul style="list-style-type: none"> ・確率の乗法定理の適用方法を再確認 ・次回のユニット・テストに向けて、何を復習すべきか、ユニット・デザイン・シートに基づいて考えるよう指導 	
復習	ユニット・テスト対策 問題集p36 教科書p54確認問題	次回	ユニット・テスト

⑦ 単元を通じた授業実践のまとめ

<p>【フィードバックの重要性の認識】 前単元で学んだ簡単な確率の発展的な単元であることを認識させた上で、独立な試行や反復試行の確率を求める方法を考えた。分からない場合の復習箇所のアドバイスを通じて授業での理解が円滑になり、生徒はフィードバックの重要性を認識できた。</p>
<p>【学習意欲の向上】 授業終了後も話し合いを続けているグループが複数あり、興味関心や学習意欲の向上がうかがえ、学ぶ雰囲気形成されてきた。</p>
<p>【予習での違和感を授業で解決】 「くじ引きで、くじをもとに戻さなくても、先に引いた人と後に引いた人の確率が変わらない」ということに予習で違和感をもち、それがかえって興味関心を高めた。変わらない理由を授業で論理的に考え理解を深めた。</p>

⑧ 習得した知識を活用するグループ学習 (別単元:「整数の性質」平成24年11月実施)

<p>●復習内容(授業の前半で学習)</p> <p>753□ 何を入れたら6の倍数になるか</p> <p>・解答 0と6</p>	<p>●類題演習(復習内容の発展・素数が3種類になる場合)</p> <p>問11 180の正の約数</p> <p>・解答 1・2・3・4・5・6・9・10・12・15・18・20・30・36・45・60・90・180 18個</p>
<p>●復習問題・●類題演習の学習を活用して、○問題1・○問題2にグループで取り組む。どうやって答えを導き出すかが大切。</p>	
<p>○問題1 1から50までの自然数のうち、素数を探し出す。まず効率よく探す方法をグループで話し合う。</p> <p>・既習事項 素数の性質 2・3・4・9・25の倍数の判定方法</p> <p>・素数の性質を知っていても、やみくもに探していたら意味がない。既習の倍数の判定方法を利用して素数かどうかを判定していく。今後、整数問題を解く上で、素数と倍数の概念は大切になる。最大公約数と最小公倍数の学習においても素数を知ることは必須である。</p>	
<p>○問題2 5桁の自然数 4□9□3 が9の倍数になる。このような数を全て答えなさい。</p> <p>・今後、p69の余りによる分類やp71の方程式の整数解などで、ある整数を文字式で表し問題を解いていく。整数に関する文章題を立式して解きかけとなる問題である。4+9+3+a+bが9の倍数になると4a9b3は9の倍数になるという立式をして解かせたい。</p>	
<p>【規則性の探究】 試行錯誤を繰り返し、少しずつ規則性に近づいていった。それぞれの考えをもち寄り、何とか解決に向かおうとしている姿が見られた。</p>	<p>s1 この班の効率のいいやり方はこれだった。</p> <p>s2 他の班は法則が見つかったのかな。</p> <p>s3 この方法にもっと早く気付きたかった。</p>
<p>【式による表現への志向】 思考をいかに表現するかを工夫し、立式がひとつの表現であることに気付いていった。また、互いに教え合う互恵的な様子が見られた。</p>	<p>s4 法則は9の倍数から16をひけばいいの。</p> <p>s5 2と11になればいいんだ。</p> <p>s4 今までの苦労は何だったんだ。</p>
<p>【活用と習得の往復】 活用をめざしながら習得できていないことに気付く姿が見られた。フィードバックの材料を得ている。この生徒s9はすぐにノートを見直していた。</p>	<p>s6 分かりやすく言って。</p> <p>s7 どうやって式で表現したらいいんだろ。</p> <p>s8 1は素数じゃないよ。</p> <p>s9 あ、そうだっけ。見直さなくちゃ。</p>

Ⅰ 国語

「現代文」 B高校 2年生 1クラス 3単位 平成24年11月実施

① 単元名(教材名) 小説(三)『高瀬舟』森鷗外 (教育出版 現代文 改訂版)

② 単元の目標 ・技能的な目標:登場人物の性格や心理変化を詳しく読み取る。
・価値(内容)的な目標:主題について様々な視点から考える。



③ 単元について

教材観	①単元内容の把握 主題の一つである安楽死は、物語の場面(寛政、執筆当時(大正)また現在においても正当な行為とは認められていない。喜助の行動は当時の共同体の価値観から外れており、道徳的には批難されるべきことかもしれない。しかし、喜助本人が喜びに満ちあふれているという事実が重要である。物語の場面や設定を押さえ、性格や心理変化を詳細に読み取り考える力は、新しい価値観に基づき個々の幸せを求めてゆく時代に生きる高校生にとって必要な能力である。
生徒観	①単元に関する既習事項など ・文学的文章では、1年次の「国語総合」から登場人物の心情を読み取ることに力を入れてきた。2年次の「現代文」では、人物のわずかなしぐさや、直接的には表現されていない部分、背景描写等からも心理を読み解けるようになってきた。 ②予測 現代とは異なる時代背景の理解が難しいと思われるが、予習と授業での解説を通じて理解を深めていく。単元末に行う意見発表会ではスピーチ等の経験を生かし、相手の意見をしっかりと受け止めて参考としたり、反論したりすることができる。 ③ユニット・デザインに基づく生徒観 ・予習でのキーワードの意味調べや調べ学習が足場かけとなり、授業での理解を深められる。 ・考えを深める復習課題を通じて自分の意見がもてるようになる。
指導観	①学習展開 ・一斉授業と発表会(ディベート式の意見発表会)を組み合わせる。 ・他者の意見から自分の考えを深めるには、まず自分の考えをもつことが重要である。人の意見に流されたり、インターネット等の安易な情報を自分の意見としたりすることが予想される。登場人物の気持ちに迫ることで、思い付きではない個々の意見を形成していくことが重要である。 ・理解深化のための記述課題プリント、意見発表会のためのワークシート(準備段階と終了後の2回記述)。 ②評価の仕方と指導への生かし方 ・意見発表会前にワークシートを回収し、自分の考えをもって臨めるよう支援する。意見発表会後の記述の変容にも注目する。 ③ユニット・デザインに基づく指導観 ・ユニット・デザインシートによる自主的な予習・復習が実践できている。知識事項の予習を生かし、本文理解を深めさせる。 ・意見発表会には、授業内容を活用したり、スピーチ等の既習事項を生かし、準備ができるだろう。達成感・充実感をもたせたい。

④ 評価規準

	a 関心・意欲・態度	b 読むこと	c 知識・理解
	他者の意見を参考にして、自分の考えを深めようとしている。	ア 登場人物の置かれている立場や環境、またその性格や心理変化を詳細に読み取るようとしている。 イ 様々な文章を読んで、人間・社会・自然等について自分の考えを深めたり発展させたりしようとしている。	他者の意見を聞き、自分の考えの根拠や表現の仕方、言葉遣い等をより豊かにしようとしている。
評価の方法	【関心・意欲・態度】他者の意見を参考にして、自分の考えを深めようとしている→発言・ワークシート	【読むこと】ア・人物の性格や心理変化を詳細に読み取ることができる。→発言・ノート・ワークシート イ・様々な文章を読んで人間・社会・自然などについて自分の考えを深めたり発展させたりすることができる。→活動の様子・ワークシート	【知識・理解】漢字・語句→ユニット・テスト、定期考査

⑤ ユニット・デザインに基づく指導計画(全6回)

回	目標	授業内容	必須ポイント・重要語句	予習内容	復習内容	評価規準 評価方法
1 / 6	二段落までの 内容理解	第一段 第二段	「高瀬舟」とは 「珍しい罪人」とは	第二段まで読んでくる 調べる:「森鷗外」	必須ポイントの見直し 小説の時代背景と「同心」という役職	bア :発言・ノート
2 / 6	三段落までの 内容理解	第三段(前半) 「島流し」の実際	喜助の境遇	第三段まで読んでくる 調べる:「慈悲」「工面」	必須ポイントの見直し 喜助の目にかすかな輝きがあったわけ	bア :発言・ノート
3 / 6	三段落までの 内容理解	第三段(後半) 『知足』の精神	喜助と庄平衛との「懸隔」 『知足』の精神 なぜ喜助が『知足』か	第三段まで読んでくる 調べる:「懸隔」	必須ポイントの見直し 『知足』の精神について 批判的なコメントを記述	a:発言・ノート bア:ノート
4 / 6	四段落までの 内容理解	第四段	「喜助さん」と呼んだ理由 「弟殺し」の経緯 「オオトリテエ」に従うはずが疑問に思った理由	第四段まで読んでくる 調べる:「不穏当」「腑に落ちない」	必須ポイントの見直し 「安楽死」について、自分なりの考えをまとめる →ワークシート	bア :発言・ノート
5 / 6	他者の意見を 参考にした自 分の考えの深 化	意見発表会 (ディベート式:賛成反対 に分かれて意見を発表 し、勝敗はつけない)	他者の意見を参考にした 自分の考えの深化 準備した個々の意見の 発表	自分の考えをもって 「発表会」に臨む	他者の考えを取り入れて 自分の考えを深める →ワークシート	a・bイ :ワークシ ート・活動の様 子
6 / 6	知識事項の 確実な習得	ユニット・テスト		ユニット・テスト対策 漢字・語句見直し	ユニット・テストの見直し 世代の違う人と話し合う	bア・c:ユニッ ト・テスト

⑥ 授業展開 (5/6)

復習・予習


『高瀬舟』ワークシート1 あなたは「安楽死」についてどのように考えるか？
賛成か反対かをはっきりと示し、具体例を挙げて記述する。

	学習活動と予想される生徒の反応	指導上の留意点(・)と評価(☆)
導入 (15分)	<ul style="list-style-type: none"> あらかじめ決めてある役割の席に移動 今日の授業の流れを確認  <ul style="list-style-type: none"> やってきたワークシートを見直し、自分の考えを確認 	<ul style="list-style-type: none"> 座席移動を指示する(下図参照)。 本日の流れを説明する(展開参照)。 これまでの考えが発表会后どのように変化したか、深化したかをワークシート2にまとめることを説明する。 自分とは異なる考えを理解し、自分の考えを見直すように促す。 ☆机間指導 ワークシートの記入確認 <ul style="list-style-type: none"> メモ用紙配布 全員で考えることを確認する。
展開 (25分)	<ul style="list-style-type: none"> 司会生徒による開始の挨拶と進行上の説明 ①賛成派・反対派、各班の意見を述べる。(各代表1名・4分) ②賛成派・反対派による質問を行う。(各3分) <ul style="list-style-type: none"> *自分と反対の意見も聞き、多様な考えに触れる。 *あいまいな部分を質問したり、問題点を指摘したりする。 ③質問を受けて、各班でどう答えるか検討する。(5分) <ul style="list-style-type: none"> *質問に答えることで、考えを深める。 *オーディエンスからの質問も受け付ける。 ④賛成派・反対派による答弁と反論を行う。(各3分) <ul style="list-style-type: none"> *提示された論点をそらさないようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 聞く態度 メモ等適宜  <ul style="list-style-type: none"> 提示された論点をそらさないよう注意を喚起する。 ☆活動の様子
(15分)	<ul style="list-style-type: none"> まとめ1 ワークシート2の記入 他者の意見を参考にして、自分の考えをまとめ直す。 	<ul style="list-style-type: none"> 他者の考えに触れて考えがどのように深まったかを問いかける。 ワークシート記入を指示し、状況によっては復習に加える。 ☆ワークシート
(15分)	<ul style="list-style-type: none"> まとめ2 ユニット・デザイン・シートに振り返りを記入する。 復習・予習、ユニット・テストの内容を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> 机間指導しながら、予習・復習についてのアドバイスをする。 次回ユニット・テストについてのアドバイスをする。

復習・予習

『高瀬舟』ワークシート2 発表会でいろいろな意見に触れ、どのような考えになったか？
特に他者の意見を聞いて自分の考えが変わったところはあるか？
次回ユニット・テストへ向けた総復習

発表会の概要

<ul style="list-style-type: none"> ●「安楽死」賛成派の基調となる主な意見 <ul style="list-style-type: none"> ・条件付きで賛成する。病気やけががもう助からないこと、本人の安楽死への意思が強いことが重要だ。 ・もし自分なら苦しみながら過ごすより、早く死にたいと思う。生きる権利があるなら死ぬ権利もあるはずだ。 	
<ul style="list-style-type: none"> ●「安楽死」反対派の基調となる主な意見 <ul style="list-style-type: none"> ・日本では法的に認められていないから、安楽死は殺人罪だ。 ・全ての生命は価値ある大切なものだ。苦しいからといって安楽死を選び、他の生命と区別するのは間違っている。 	
<ul style="list-style-type: none"> ●出てきた意見の一例 <ul style="list-style-type: none"> ・本人の意見の尊重といっても医者は人を殺すことになるし、周りの人はそう望んでいないかもしれない。周りの人のことを考えるべきだ。 ・反対派へ、家族のことを考えなければいけないと言ったが、家族のことを思って死のうとする人もいる。 ・賛成派へ、安楽死を望むかどうかは自由。助ける方法がない人たちは自分の意識がない場合が多い。そんな中で周りが決めることはできない。自分で意思表示できるような人は安楽死をすべきでないのではないか。 	
<ul style="list-style-type: none"> ●生徒の感想の一例(後日アンケート形式で記入) <ul style="list-style-type: none"> ・意見を言い合うということは、相手の考えをしっかりと考えて受け取ることにつながり、納得するところや反対のところに気付いた。 ・安楽死について深く考えて、相手をどう納得させるか頭をひねることができた。本気で考える感覚を身に付けられたと思う。 	
<p>【様々な文章を読む】 より考えを深めるには主題の似通った様々な文章に触れることが有効である。今回はそのような取組はできなかったが、夏休みの課題や年間計画を工夫し、今後行っていきたい。</p>	
<p>【他者の意見から自分の考えを深める】 意見発表会では、「自分の考えをもってくる・考えを交流させる・考えを深める」という3段階を意識して構成を工夫した。予習(準備)が授業で生き、積極的に参加することができた。一人ではうまく言葉にできなかったような感覚的な思いが、他の生徒の発言で言葉になり、深くうなずいている生徒が多かった。また、自分と異なる意見に触れ、問題をとらえ直し、難しさを再認識した生徒が多かった。それぞれの考えが深まった有意義な時間となった。</p>	

⑦ 単元を通じた授業実践のまとめ

<p>【予習による理解の円滑化】 生徒は難しい言葉があると本文が理解できないことが多く、読解の大きな妨げになっている。つまりきょうなポイントになる言葉を事前に予習として調べさせることにより、本文内容に入りやすくなり、文章の流れに集中して読むことができた。また、適切な予習内容を課すことで、これだけ分かっていれば読めるという安心感をもたせることができた。</p>
<p>【復習による理解の深化】 授業の復習として、本文の理解を活用し、自らの考えを深める課題を出した。意味を広げて考えたり、具体例を挙げて考えたりすることを指示している。いろいろな生活場面を想像し、具体的に自分の立場で考えられるようになってきた。</p> <p>○課題の一例 知足者富(老子)「現状に満足し不満をもたないことが幸福に通じる」。この考えに批判的にコメントしてみよう。</p> <p>s 現状に満足したら確かに幸せに生きていけるかもしれないが、それは逆にこれ以上頑張らなくてよいと、もっと幸せになる可能性をあきらめている向上心のない考えのように思う。部活や勉強、将来の仕事でもこの「知足」の精神は、マイナス志向だと思った。</p>

① 単元名(教材名) LESSON2 Why The Sad Face? (池田書店 Revised Edition DAILY ENGLISH CHOURSEⅡ)

- ② 単元の目標
- ・不定代名詞の主なものと、所有代名詞および再帰代名詞の用法を理解できる。
 - ・自国と各国、各地の文化の違いを知ることにより、異文化を理解し認めることができる。

③ 単元について

教材観	①単元内容と学習目標
	・アメリカ人教師と日本の生徒の間の異文化間混同の話題。各国の独特の文化の存在を知り、理解し合うことが大切なことを学ばせる。 ・異文化を知るだけでなく、相違を明確にした単元は初出である。風俗習慣の違いについての内容理解を正確に行わせたい。 ・関係代名詞・不定詞などの既習事項を多く扱っており、本単元で学ぶべき文法事項である代名詞にも既習事項が含まれている。具体例や、図等を示し代名詞を正確に学ぶことにより、場面や状況を正確に把握し、伝えられるようになることをねらいとする。
生徒観	①重要な既習事項
	②予測
	③ユニットデザインに基づく生徒観
指導観	①学習展開
	②評価の仕方と指導への生かし方
	③ユニット・デザインに基づく指導観



④ 評価規準

ア コミュニケーションへの関心・意欲・態度	イ 表現の能力	ウ 理解の能力	エ 言語や文化についての知識・理解
①積極的に口頭練習に取り組んでいる。	①正しい強勢・イントネーション・区切り等を用いて音読したり暗唱したりすることができる。	①本文を読んで書き手の意向を正確に理解することができる。	①不定代名詞の主なものと、所有代名詞および再帰代名詞の用法を理解している。 ②異文化間の風俗習慣の違いを理解している。

⑤ ユニット・デザインに基づく指導計画(全6回)

回	目標	授業内容	必須ポイント・重要語句	予習内容 (何を・どのように)	復習内容 (何を・どのように)	評価規準 評価方法
1 6	音読練習から本文の内容を推測する	LESSON1ユニット・テスト 新出単語・熟語 本文空所補充 LESSON2本文の音読	本文内容・文法事項理解 単語の発音・意味を覚える しっかり聞き取る 積極的に音読練習	LESSON1総復習 ・文法事項を見直す ・本文内容を見直す 単語・熟語を覚える	ユニット・テストの復習 新出単語・熟語 ・発音練習・意味 Lesson2本文の音読	ア① 活動の観察
2 6	本文の内容理解 不定詞の副詞的用法の理解	導入(動画) 新出単語・熟語 本文音読 グループ学習: 本文読解 本文の意味の確認	文化の相違の理解 単語の発音・意味を覚える 積極的に音読練習 積極的に話し合う 発表態度・聞く態度	本文の意味を考える (4文目まで)	単語・熟語 ・次回テスト対策 本文の読み直し ・復習チェックのところ Creative Writing プリント	ア① ウ① エ② 活動の観察 ワークシート
3 6	本文の内容理解 受動態の理解	単語・熟語テスト 本文音読 グループ学習: 本文読解 本文の意味の確認	20問(単語リストから) 音のつながりを意識 積極的に話し合う 発表態度・聞く態度	本文の意味を考える (5文目から最後まで)	単語・熟語 間違えたもの 本文の読み直し ・復習チェックのところ Creative Writing プリント	イ① ウ① エ② 活動の観察 ワークシート
4 6	聞くことによる本文の内容理解	本文音読 グループ学習: 本文読解 CHECK(B)正誤問題 TRY 英作文	音のつながりを意識 積極的に話し合う Listeningでの内容理解 異文化間混同の理解	TRY(教科書p11)の意味を考える	文法事項の理解確認 ・復習チェックのところを重点的に	イ① ウ① エ② 活動の観察 ワークシート
5 6	不定・所有・再帰代名詞の理解	LESSON2文法プリント	代名詞の理解	RULES 不定代名詞 ・a~i確認してくる	本文内容の総復習 文法プリントで文法事項の復習	エ① 活動の観察 ワークシート
6 6	様々な異文化についての英文の大意をつかむ	グループ学習 ユニット・テスト Say it yourself	異文化間混同への理解 深化 文法事項理解 積極的に音読練習	Say it yourselfの意味を考える	ユニット・テストの復習 Mission Possibleプリント ・Justin Bieberの歌詞から (代名詞の活用的問題)	イ① エ① 活動の観察 ワークシート

⑥ 授業展開 (2/6)

復習	新出単語・熟語・発音練習・意味を覚える Lesson2本文の音読	予習	本文の意味を考えてくる
学習活動と予想される生徒の反応		指導上の留意点(・)と評価(☆)	
導入 (5分)	挨拶 天候・曜日・日付などについての質問に答える。 ・t; How are you? ・t; What day is it today? 等 本文の導入(動画を見る) 1 「Cultural Differences Between America and Japan」 5 動画についての会話を通じて理解を深める。 t; Did you catch the differences? s; Yes, I did./ No, I did' t. t; What does this mark (○) mean? s; It means Ok. 等	<ul style="list-style-type: none"> 聞き取りやすい大きな声で語りかけ、発言しやすい雰囲気を作る。 最初は全体に問いかけ、反応を見ながら指名する。 動画を使って、いくつかの日米の文化の違いを紹介する。 動画についての会話を通じて理解のヒントを与える。 ✓ ○ × のカードを用意し、生徒が考えやすいように導く。 ☆日米の文化の違いについて理解しているか。エ② 	
展開 (10分)	音読練習をする。 ・単語と熟語の発音と意味の確認 Word Cardを利用した反復練習 英語→英語 日本語→英語 ・本文CDを聴く。 教師の後に続いて読む(Model Reading)。 ・4人一組のグループで4人一斉に読む(Chorus Reading)。 4人で1文ずつ順番に読む。 ・音読の発表をする(2~3グループ)。	<ul style="list-style-type: none"> 間違えを恐れずに発音するように導く。 発音できない単語、覚えにくい単語にチェックをするよう指示する。 Word Cardを利用してリズムカルに反復練習を行う。 次回単語テストの予告をする。 単語から句、文につながる音や調子に注意させる。 意味の切れ目を読み方を通してはっきりと生徒に伝える。 ☆積極的に音読練習をしているか。ア① 	
展開 (20分)	本文内容について予習でどこが分からなかったかを出し合う。 t; 分からなかったところはどこですか? s; 2文目 s; 3文目 本文内容理解のためのグループ学習 ・最初から4文目までの訳をグループでワークシートにまとめる。 全体で本文の内容を確認する。 ・一文ごとに発表者が順番に発表する。 ・間違えたところの訂正	<ul style="list-style-type: none"> 予習で分からなかったところを出し合い全体で共有させる。 理解が不十分なところにはチェックをするように指示する。 (グループは6~7人×6、席順で分け、リーダーを決めてある。) 重要な表現や、間違えたところを板書する。 重要な文法事項について解説する。 不定詞の副詞的用法(既習)の訳出の仕方など ☆本文の内容を理解できたか。ウ① 	
まとめ (5分)	・ユニット・デザイン・シートに今日の振り返りを記入する。 ・復習内容・予習内容の確認をする。 挨拶 t; That's all. See you.	<ul style="list-style-type: none"> 今日分かったことは何かを確認するよう全体に呼びかける。 机間指導しながら、予習・復習についてのアドバイスをする。 チェックしたところを中心に見直すように指示する。 ・Creative Writingプリントで不定詞をしっかり復習するよう伝える。 	
復習	新出単語・熟語 意味を覚える	復習	本文の読み直し・Creative Writing
次回 単語テスト	次回授業へ	予習	続きの本文の意味を考えてくる

⑦ 習得した知識を活用するグループ学習 (当該単元の最終回で実施)

異文化間混同の意味を発言を募りながら確認させた後、初見の課題に取り組む。文化について書かれた8つの文章の中から、異文化間混同に関わるものに✓を付ける。厳密な日本語訳ではなくおおまかな内容理解に努める。
s1 単語の意味が分からない・・・机間指導で単語知識を補う。辞書を配布し利用を促す。
s2 Britain名前? s3 Inがあるから地名かなんかじゃない? 辞書ひこうよ・・・知識を集めて何とか理解しようとしている。
s4 thumb親指? palmって何? s5 指だから掌でいいんじゃないかな・・・知っている単語から類推して理解しようとしている。
s6 ケンとエミの1階の意味が違うんだ。 s7 分かった、ground floorがイギリスでは1階なんだ・・・異文化間混同から連想している。
s8 3番関係なさそう、日本のことしか入っていない・・・大意をとらえおおまかな理解を得ている。
【理解の広がり】 この課題を通じて異文化への意識を高め、新しい視点(欧米以外の異文化の視点や日本文化を相対化する視点)が育まれた。本文で学んだ知識を活用しながら新しい知識をさらに習得し、思考を広げていく様子が見とれた。

⑧ 単元を通じた授業実践のまとめ

【誤読の修正から知識の習得へ】 予習での誤読を互いに修正し合い、正しい文脈に近付くことができた。例えば、右の部分の訳出は、全体の確認で、半数のグループが間違えた。授業者の文法的説明でよく理解できた。teachB to AのAに当たる部分である。間違えを共有することで、より深い理解につながり、こうした積み重ねにより、英語表現の特色への理解を深めた。	(例) first-year s1 「最初の年? 1年目?」 s2 「ハイフンだから1年生じゃない?」 s3 「中学1年生ってことだね。」
【重要文法事項の徹底】 内容理解に欠かせない既習重要文法事項の定着と深化を図った。右(例)のように各グループの理解はばらばらだった。正しくは不定詞の副詞的用法の目的を示す表現で「英語を学ぶために」と訳す。予習でよく分からなかった部分が授業者の説明で理解でき、生徒は大きくうなずいていた。原因を示す表現もあわせて確認しCreative Writingプリントでの復習を指示した。知識の活用に結び付く英作文である。他にも受動態や代名詞について同様に既習文法事項の徹底を図った。	(例) to learn English g1 英語を勉強しようとする g2 英語を学んでいて g3 英語を頑張っている

(2) 授業者から見たユニット・デザインの成果と課題

6月から11月の実践を通じて授業と家庭学習の一体化が少しずつ定着してきた。その結果、生徒に様々な変化が表れた。以下は11月に授業者の年間の感想を持ち寄り、項目ごとにまとめたものである。

① ユニット・デザインに基づく取組の成果と生徒の変化

【学習意欲の向上】 確実に学習意欲が向上している。教科書範囲の学習では物足りなくなり、問題集や発展学習についての相談が増えた。また、自分の考えを確かめようとする質問が多くなり、思考の深まりが伝わってくる。自分の考えや答えをもって授業に臨み、それを確かめようとすることは、毎時間手の届く目標をもつことに等しい。生徒にとって学習の見通しが立つことは非常に有効であり、到達目標が分かることで学習が効率化・円滑化されていった。授業が楽しいという生徒が増えている。

【学力の向上】 家庭学習量が増え成績が向上した生徒が多い。そうした生徒は予習・復習によって成績が向上し、成績の向上を励みにさらに予習・復習に向かうというスパイラルができた。生徒の様子から、授業者自身も日常の家庭学習・学習習慣の有効性を再認識した。

【ユニット・デザインの定着】 実践開始当初は予習・復習内容について細かな指示を出していたが、徐々に減らすことができた。自然に自分で考えて学習するようになり、学習方法が身に付いてきている。ユニット・デザインを最小限の学習としてとらえられるようになってきた。一方、授業者にとっても、生徒の理解度や分からないところがユニット・デザイン・シートからはっきりと把握できたため、声かけや補習がよりの確になり、授業が円滑に進められた。

【学習習慣の形成】 他教科でもユニット・デザインを作ってほしいという生徒も多く、自主的に予習・復習をする生徒が増えた。見通しをもって準備ができるようになり、準備が成果をもたらすことが実感できてきた。多くの生徒にPDCAサイクルや学習習慣が形成されている。

【グループ学習】 グループ学習の最大の成果は学習環境の形成である。休み時間に分からない問題を一緒に解いていることが増えた。答え合わせのグループ学習では、伝え方を工夫することが思考力・表現力の育成につながり、教え合ってつまづきを解消する互恵的な達成感のある活動となった。また、記憶・定着の効果もあった。活用的な内容のグループ学習では、「個の考えの形成」→「集団での多様な意見の交流」→「個の考察の深化」という流れが実践できた。グループ学習は生徒の好感度も高く(表5)有効だが、一斉授業よりも時間がかかるため日常的に行うことは難しい。単元末の活用的な内容に限って行いたい。

表5 検証クラス生徒アンケート①

グループ学習について最も近いものに○をつけてください。			
とてもよい	まあまあよい	あまりよくない	まったくよくない
22.7%	54.1%	19.1%	4.1%

② 各教科の視点から

教科の特性を生かした予習・復習内容を工夫し、試行錯誤を重ねた。いずれの教科においても、授業と家庭学習の一体化の有効性が実感できた。

【数学】 予習：先行学習・関連する既習事項の復習 復習：類題演習・問題集

生徒は、それぞれに予習で分からなかったところに重点を置き、授業に目的意識をもてるようになり、初見の問題に一人で向き合うことで思考力・判断力が養われた。また、予習としての既習事項の復習で自分の理解度に合わせた足場かけができ、習得が円滑になった。授業内容が難しくなってきたこともあり自主的な学習量は徐々に増え、確実な習得に結び付いている。

【国語】 予習：語句の意味調べ・調べ学習・本文の読み 復習：記述問題・準拠ワーク

キーワードとなる語句を予習で調べることで、本文の流れを妨げずに読むことができ、語句の意味が分かると本文がよく分かることが実感できた。調べ学習では、予習での単純な知識としての理解を授業で本質的な理解に深めることができた。また、復習の記述問題では、授業を振り返り自分の考えをもち、次の授業の発表で多様な考えに触れ考えを深め、異なる意見の意味も分かるようになった。

【英語】 予習：本文を読む・本文の意味を考える 復習：反復練習・発展的英作文

予習で曖昧だった理解が、授業で鮮明になり、理解を深めることができた。ペアワークや発表を通じて家庭学習の成果を確かめ、達成感を得ることができた。復習では、授業で学んだ文法事項を活用して英作文に取り組むことで、知識の定着と表現力の向上がともに図れた。

③ 課題

【授業者の見通しの難しさ】これほど単元の授業展開について深く考えたことはない。綿密な予測を行ったが、反することもあり、既習のはずが理解不十分なために計画の微調整をしたこともある。ユニット・デザインは便利で分かりやすいプログラムだが、立案する授業者には厳しい面もある。

【生徒の取組の個人差】学習習慣が身に付いてきた生徒が多い中、家庭学習に取り組まず、成果の出ない生徒もいた。アンケートによると、7月：6%、11月：3%の生徒はほとんど家庭学習をしていない。全員に取り組ませることができるよう、授業者は頑張っている生徒への称賛や全体への励ましを繰り返し、個別のアドバイスを工夫しながら、家庭学習の有効性を訴え続けていく必要がある。

Ⅲ 研究のまとめ

1 研究の成果 ① ～生徒の記述とインタビューから～

学習習慣の形成をめざしてユニット・デザインに基づく実践を行ってきた。成果として、授業者からは「学習意欲の向上」「学力の向上」「ユニット・デザインの定着」「学習習慣の形成」が挙げられた。まとめとして、生徒の日々のユニット・デザイン・シートの記述と、延べ20人の生徒に行ったインタビューを分析し、生徒の変化から研究の成果を探る。生徒の学習の軌跡や様々な思いが見えてきた。

(1) 学習への必要感と期待感の向上

(●は生徒の記述・○はインタビュー)

● (数学)予習の時点では答えの出し方がよく分からなかったが、授業で理解できた。
● (数学)予習をしなかったのであまり理解できなかった。予習の重要性が分かった。
● (国語)家でいろいろな言葉の意味を調べた。調べた意味を理解してから話を読むと、結構授業内容が分かった。
● (英語)予習してきてよかった。より理解が深まった。
○ 面倒くさいと思うこともあったが予習をやっておいてよかった。授業で生かせ、達成感がある。
○ 前までテスト直前まで勉強をしなかった。ユニットデザインでやることをやっているうちに自分からやるようになって、続けていくうちに理解度が上がってきた。いやだったものが楽しくなってきた。
○ 最初は宿題と思って予習復習をやっていたが、家で教科書を開くことが癖になり、毎日勉強するようになった。家での集中力が違ってきて、長時間でも平気になり、深い勉強ができるようになった。

予習である程度理解し、授業で本格的に理解した生徒が大多数であり、予習は授業への有効な足場かけになった。見通しをもつことで授業中落ち着いて考えることができ、理解が深まる様子も見られた。始めは予習・復習は与えられた課題(外発的)という意識が強かったが、学習を重ねるうちに徐々に自主的(内発的)な学習に転換している。授業に直結した予習・復習への確かな必要感をもつようになったと推測される。予習だけで完全に理解できたケースはほとんどない。予習のせいで授業中に退屈したという記述は全検証中1人による1回だけであり、その生徒も単元中盤からは予習してよかったと書いている。

また、予習をすると授業への目的意識や期待感が高まることも分かった。課題の難しさが、かえって授業への意欲を高めている。一人では分からなかった課題が授業でできるようになれば、分かったという実感が深まり、振り返りによって自分の成長をはっきりと認識できる。分かったことが、やればできるという期待感につながり、必要感と期待感が学習意欲の向上に結び付いていった。

(2) 学習意欲の向上

勉強が楽しいという記述が多くあり、自主的な学習の足跡が徐々に増えてきた。粘り強さも見受けられるようになり、やればできるという肯定的な姿勢が読み取れる。「頑張ります」など意気込みや目

標を記述する生徒も多く、学習意欲の向上が見られる。また、成果や失敗を自分の努力に帰属させていることから主体的に取り組んでいることが分かる。インタビューでは、自分の努力の結果から成果が得られたという確信、自分は成長し変わったという実感が伝わってきた。

● (数学) やっているうちにとても楽しくなってきた。理解できるとすごい楽しいんだと思った。
● (国語) とても難しい内容で当日までかなり悩んだ。いい意見が思い浮かんだときは「よっしゃ」と思った。
● (英語) 自分の分からなかったところをきちんと復習したから点が取れた。きちんと文法を覚えて完璧にできるように頑張る。
○ 勉強の仕方が変わった。何にもしないでテストに臨んでいたのが、ノートの見直しや何か、勉強するようになった。したくなくてしなかったわけじゃない。やる気がなかった。ユニット・デザインで勉強をやるようになって、おもしろくなってきた。自分は勉強は好きではないが、分かったと思うようになった。気付いたから勉強するようになって少しずつ楽しくなった。
○ 中学の時はテスト1週間前にならないと教科書を持って帰らなかった。ユニット・デザインをもらってから毎日教科書を持って帰って予習復習してワークとか問題集で足りなくてプリントをもらった。勉強した分だけ自分に返ってくるのが嬉しくて勉強が好きになったし、他の教科も好きになってきた。勉強しないと次に進まない。シートをもらってから、遊びは後にしてまず勉強を頑張るように変わった。

(3) 学び方の習得

● (数学) 一度やった問題も繰り返し何度も解いて文章題に慣れていきたいと思う。
● (数学) 図をきちんとかいて予習したので分かった。
● (国語) 今回のテストで自分の苦手な部分がしっかりと分かったので、ちゃんと復習をする必要がある。
● (英語) 分かっているつもりでもできていないところがテストで分かったので自分の苦手な文法を集中的に復習したい。
○ 今まで復習しかやっていなかった。予習はユニット・デザインから始めた。予習する習慣をこの先も続けていきたい。予習する勉強方法、新しい勉強方法を考えて、それを他の教科にも応用していきたい。

生徒はそれぞれにつまずくポイントが異なる。振り返りから自分はどこが分かってどこが分からないかを把握し、自分の強みや弱みに気付いていった¹⁷。気付きをもとに学習を焦点化できた生徒や自分に合った学び方の工夫をした生徒もいる。市川はその著書¹⁸の中で「内容関与的(学習内容に関係が深い)動機が高い生徒は、自分の学習の仕方をいろいろ工夫してみようとする傾向がある」と述べている。学習内容それ自体への興味を深めている生徒が増えていることが推測される。

○ 授業のまとめの振り返りが記憶に残り、勉強がしやすくなった。ユニット・デザイン・シートがあったからテスト勉強も効率よくできた。
○ ユニット・デザインで自宅で学習する時間ふえた。授業の前にそれをやっておくことで授業の内容も分かりやすくなった。どこができてどこができていないのかの区別が分かるようになってから、復習も短時間で集中してできるようになった。
○ 今まで予習も復習もあまりしなかったが、ユニット・デザインを始めてから自分で他の教科でも教科書を見るようになった。授業に入りやすい。自分の中で分かるところと分からないところが整理できている。予習復習をやるようになったおかげで成績も向上した。

一方、授業者は課題に応じて図をかいて考えること¹⁹や既知の似ている問題をヒントにすること²⁰などをアドバイスした。多くの生徒が図や表の活用の有効性を述べていた。また、インタビューではユニット・デザインそのものの有効性に触れた発言があった。広い意味での学び方としてPDCAサイクルが自覚できてきたといえよう。「復習の時間確保をしないからテストができない」など広い視野から教訓を得たり、自分の学び方や時間管理の問題を見直している生徒も多くいた。

(4) 学習習慣の形成

○ 今まで予習・復習はやっていなかった。ユニット・デザインを通じて予習復習が癖になってきた。
○ 以前は予習復習を全然しなかった。ユニット・デザインをやってから、他の教科でも結構そういう習慣ができた。テストの点数は少し上がった。予習・復習をすると集中力が高まり、勉強ができるようになった。
○ ユニット・デザインで計画的な勉強が身に付いてきた。日々の授業を大切にしたいと思うようになった。
○ 家庭学習の目測ができ、自分の生活時間配分に区切りをもって生活できるようになった。好きなことをやりたいから、やらなきゃならないことを先にちゃんとやろうという気持ちが出てきた。
○ 中学では自宅学習もせず、あまり頑張った感は何れなかった。高校に入ってユニット・デザインがあったり、授業の進み具合の変化があったりして、今までやってきたことだけじゃ足りないと感じた。これからの生活には勉強を一部として位置付けていきたい。

インタビューから学習の習慣化が伝わってくる。生活の一部に学習を位置付けようとする発言、日常的に意欲をもって学習している様子、また、検証教科だけでなく、他教科にも影響が及んでいることからある程度学習習慣が形成されてきたといえよう。

¹⁷ このような学習方略は、教訓帰納と呼ばれる。(出典 注13に同じ p67)

¹⁸ 市川伸一著『学ぶ意欲の心理学』PHP新書2001年 p58

¹⁹ 精緻化方略。イメージあるいは言い換えなどによって学習材料を変換することをいう。(出典 注13に同じ p56)

²⁰ 体制化方略。分類、階層化などによって各要素の関連を作ることをいう。(出典 注13に同じ p56)

2 研究の成果 ② ～データから～

(1) アンケート結果から

11月に検証クラスを対象に実施したアンケート(図13)によると、77.7%の生徒が「とてもよく取り組んだ」「まあまあ取り組んだ」と回答している。生徒の現状やニーズに合った取組だったと考えられる。予習・復習の習慣化については「習慣になってきた」「少なくなってきた」を合わせて44.5%である。習慣形成の難しさを実感するが、市立高校生へのアンケート(I-3)から類推すると本研究の成果は、一定程度あったといえよう。

勉強をする理由に「分かれると楽しいから」と答えた生徒が5月との比較で16%から25%に増え(図14)、授業が分かり楽しくなってきたことがうかがえる。「上手な勉強の仕方が分からない」「こつこつと努力できないで困る」などが減少しており、学び方の習得、学習意欲の向上を含んだ本研究が、よい影響を与えたと考えられる。

(2) 授業の理解度の向上(図15)

ユニット・デザイン・シートには、その授業の理解度をa～dで記入する欄を設けた。全検証クラスの記録を数値化し、10段階に分類し、7月と10月を比較した。授業内容はいずれの教科も10月のほうが難しくなっているにもかかわらず、授業への理解度は向上した。ユニット・デザインの成果が一定程度出ていると考えられる。

(3) 学力の向上(図16)

検証クラスでは、いずれも定期テストの平均点が上がった。比較クラスを設けることができたB高校では、5月には差がなかった平均点が、検証以降のテストで10点以上の差になった。検証クラスの生徒は、以前はほとんど答えていなかった思考力・表現力を要する記述問題を、解答欄いっぱいを書くようになった。授業者は、ユニット・デザインを通じて、基本的な理解が深まったために記述問題に挑む意欲が生まれたこと、主体的に自分の考えをもつようになったことを要因として挙げている。テストで測れる学力は限定的なものではないが、こうした結果を励みにして、生徒たちが学習意欲を向上させていることが重要である。

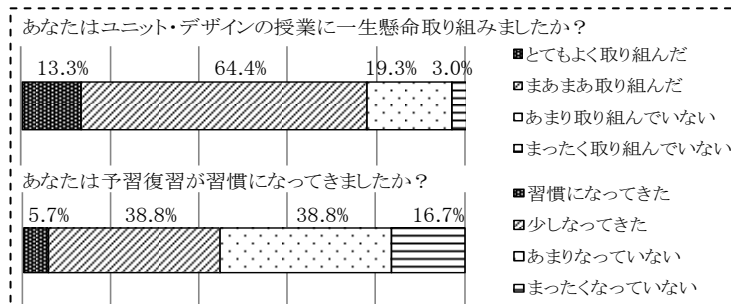


図13 検証クラス生徒アンケート②

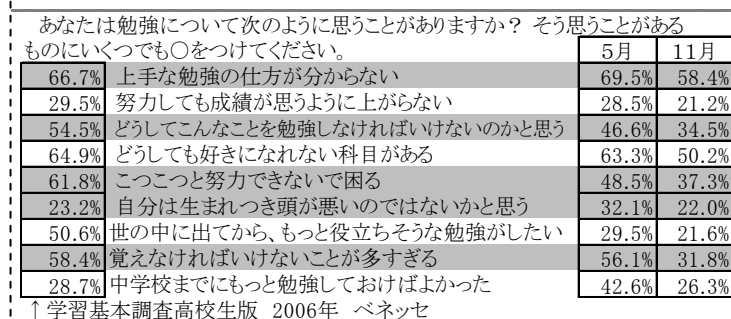
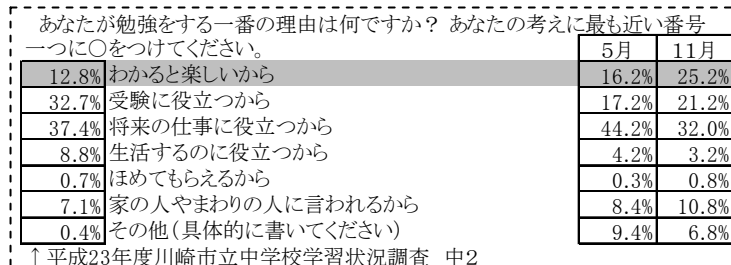


図14 検証クラス生徒アンケート③

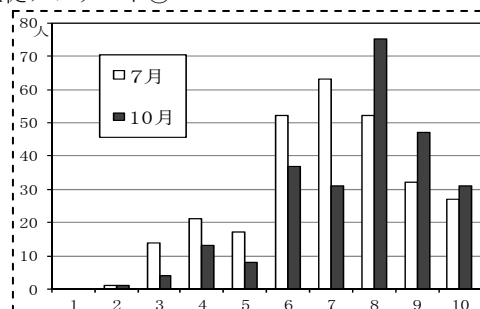


図15 授業の理解度の推移

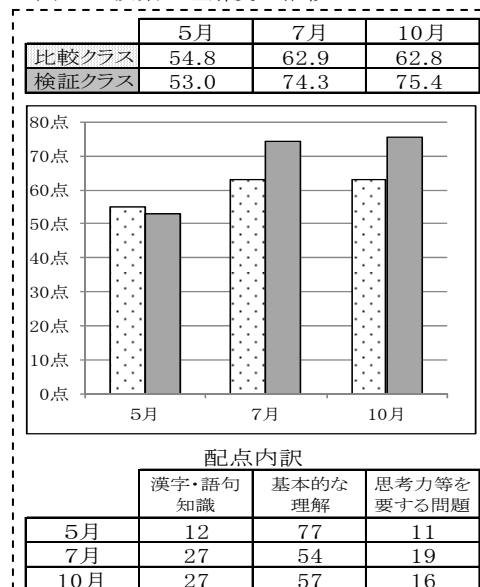


図16 定期テストの得点の推移

3 今後の課題

本研究の成果は一定程度確認できた。今後の課題をまとめる。

第一に、既習事項をさらに把握することの重要性についての課題が挙げられる。ユニット・デザインに基づく指導計画の立案において、当該単元に関連する既習事項の習得状況の把握が重要である。生徒がどれだけ分かっているかを的確に把握することで、手立てを準備することができ、指導計画を円滑に進めることができる。また、予習に既習事項の復習をあてることは授業理解が深まり非常に有効であり、最適な予習内容を設定することは、家庭学習の必要性を生徒により深く実感させることにつながる。的確な既習事項の習得状況を測るためには、単元開始前のテストの実施が有効である。ユニット・テストの結果と組み合わせることで、より生徒の実態に即した指導計画の立案ができるようになる。

第二に、研究の汎用性についての課題が挙げられる。検証は数学・国語・英語の3教科で行った。ユニット・デザインは、分かりやすいプログラムであり、他の教科にも応用できると考える。今後、いろいろな教科での可能性を確かめつつ、自らの授業でも取り組み、汎用性を高めていきたい。

第三に、認知心理学を始めとした学術的な側面からの課題が挙げられる。学習習慣の形成をめざした取組を進める中で、PDCAサイクルの働きが多く気付きをもたらすこと、学習への必要感と期待感から学習意欲が向上することなど、学習者の心理に関わる側面に多く触れてきた。授業者にとって、学習者の心理への理解を深めることは重要であり、今後、学習方略についての学術的な裏付けをさらに明確にしていく必要があると考える。

第四に、さらに取組の幅を広げることについての課題が挙げられる。本研究は学習指導の視点から学習習慣の形成をめざしてきたが、習慣形成にふさわしい日常的な取組とするために、学級担任の協力があればより大きな成果が期待できる。学習習慣についての成功・失敗体験を共有し、継続学習の必要性を認識させる学習指導(LHRなど)を組み合わせることなどが考えられる。学年全体、学校全体での取組であればさらに効果は大きいと推測する。また、キャリア教育や生涯学習の視点から、将来の目標と結び付けたり、豊かな人生を築くことにつなげたりする働きかけを総合的に組み合わせることで、より効果的な取組ができるのではないだろうか。

最後に、研究を進めるに当たり、ご指導ご助言をいただきました講師の先生方、また、ご協力くださいました校長先生並びに教職員の皆様に、心より感謝し、厚く御礼申しあげます。

【参考文献】

- | | | |
|-----------------------------------|---------|-------|
| P・F・ドラッカー著 上田惇生訳『ポスト資本主義社会』 | ダイヤモンド社 | 2007年 |
| 市川伸一著『学ぶ意欲の心理学』 | PHP新書 | 2001年 |
| 市川伸一著『教えて考えさせる授業』 | 図書文化社 | 2009年 |
| 市川伸一著『学力低下論争』 | ちくま新書 | 2002年 |
| A・オリヴェリオ 川本英明訳『メタ認知的アプローチによる学ぶ技術』 | 創元社 | 2009年 |
| 三宮真智子編著『メタ認知 学習力を支える高次認知機能』 | 北大路書房 | 2009年 |

【指導助言者】

- | | |
|---------------------------|-------|
| 国立教育政策研究所 初等中等教育研究部長 | 工藤 文三 |
| 川崎市立高等学校長会会長(川崎市立商業高等学校長) | 新保 利幸 |
| 川崎市総合教育センター指導主事 | 安藤 勉 |